



JAグループは、「農業者の所得増大」「農業生産の拡大」「地域の活性化」を基本目標として、組合員、地域から「必要とされ、なくてはならない存在」となることを目指し、さまざまな取り組みを展開しています。

農業を拓く協同組合

JAと農業

監修=JCA  
(日本協同組合連携機構)

第16回

## 世界で活躍する協同組合

毎年7月の第1土曜日は国際協同組合デーです。協同組合の起源は、産業革命後の労働者の厳しい生活を打開するため、1844年、英国のロッチデールという町で、労働者が自ら出資して協同組合を設立し、小さな店を始めたことにあります。協同組合は各地に広がり、1895年に国際組織、国際協同組合同盟(ICA)ができました。世界110カ国から311組織が加盟し(2019年4月現在)、世界の10億人を超える組合員を代表しています。

国連は2012年を国際協同組合同年とし、16年には国連教育科学文化機関(ユネスコ)が、「協同組合の思想と実践」を無形文化遺産に登録しました。協同組合が「さまざまな社会問題への創意工夫あふれる解決策を編み出している」と評価したためです。

JAも「農業協同組合」として、協同組合間の連携を取りながら、より良い社会づくりに向けた取り組みを進めています。

### 語句解説

#### 【協同組合間連携】

地域の課題解決のため、多様な協同組合が力を合わせて対応します。日本でも、地域、都道府県、全国、それぞれの段階でさまざまな連携が行われてきました。全国段階では、JA、生協、漁協、森林組合、ワーカーズコープ、労働金庫などの全国組織が「日本協同組合連絡協議会(JJC)」に集い、連携を進めてきました。JJCの取り組みを引き継ぎ、協同組合がさらに連携を強め、地域で果たす役割・可能性を広げていくため、18年に「日本協同組合連携機構(JCA)」が発足しました。



耕そう、大地と地域の未来。  
(JA広報通信より)

## JA広島市の自己改革

### 地域一丸となってブランド化へ 芸北地域担い手ネットワーク協議会

北広島町芸北地域の農業法人や大型農家などの生産者とJA広島市や北広島町、広島県などで組織する「芸北地域担い手ネットワーク協議会」は5月30日、会員21名が集い、芸北地域の水稲の主要品種「あきたこまち」の展示圃を設置し、良質米づくりに向けた取り組みをスタートさせました。

芸北地域は、年間を通じた15~20℃の寒暖差が米づくりに適しているものの、圃場によっては150mの標高差があり、また土壌の鉄分含有量が少ないため、作物の根の張りが弱く、他地域に比べ収量が少ないこと、さらに、近年の需給調整の仕組み転換やコメの産地間競争の激化など、担い手が安心して稲作できる仕組みづくりが地域の喫緊の課題でした。そこで、JA広島市およびJAグループが中心となり、土壌成分や食味値など一定の水準を設定し、「あきたこまち」のブランド化に着手することとしました。

まずは、設置した展示圃(6カ所・計3ha)で大規模な試験栽培を実施し、その結果を踏まえ、同地域における「あきたこまち」良質米クラブ(仮称)を立ち上げる予定です。試験栽培にあたっての堆肥やオリジナルブレンド肥料等については、JA広島市と全農ひろしまが支援し、さらに今後、同地域の稲作農家にもこの取り組みへの参加を呼びかけ、実需者・消費者に訴求力のある産地づくりを目指していきます。



試験展示に向けてあきたこまちの苗を植え付け